ゲシュタルトの庭で

T=Era

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲシュタルトの庭で

【Ｎコード】
Ｎ３２１８Ｏ

【作者名】
Ｔ＝Ｅｒａ

【あらすじ】
ある日突然「私」に訪れた、日常という恐怖・・・・・！
次々と起こる異常な現象、全てのカギを握るのは、あの黒い写真立てだった。
恐怖に打ち勝つために自ら語り続ける「私」が独白を終えたとき、最後の恐怖が「私」を襲う！

4月24日　?.

その日の朝も、私はいつも通り、社会一般的にいえば日常という時間軸を過ごすはずだった。私の朝の定義は、つまるところ瞼を開いてベッドからいやいや這い出すことを言うのであるが、その過程において、私は不自然さを目撃したのである。日常から大きく外れた、といってもいいだろう。

私の部屋にある、樫の木で造られたヴィンテージものの書斎机。その上に置かれていた写真立てに、何気なく私は視線を寄せた。寝ぼけ眼だったせいかもしれないので、その時の記憶が確かなのか定かではない。が、あれを見たときの衝撃は今でも忘れ難い。

私はその異様な写真立てを見つめ、その数秒後に、自然と私の右手はその縁に伸びた。置きたての力の入らない手で、手のひらより少し大きいそれを持ち上げた。

そこには、かわいらしい子供や愛する妻の写真は入っていなかった。代わりに、真っ黒なただの紙切れが、そこになんの不自然さもなくおさまっていた。だが、こんなものを自分が入れるはずがなかった。この手のジョークは行わないほうであるし、行ったところでここは私の部屋だ。誰もこの件についてコメントする者はいない。手で触ってみると、確かに写真専用の紙の感触がした。

私は、ある種異様なこの物体にしばらく目を凝らしていた。すると、どこからか奇妙な感情が生まれてきた。それは、これがある種必然的に入っていたのではないか、という、自分でも信じがたい結論であった。

と、いうのも、この朝は本当にどうかしていたのだろう。私はここへきて、私が妻ばかりか、子供の一人も持っていないことを思い出したのである。

私は釈然としない感情を恐らく膵臓のあたりに感じながら、いつ

ものように戸を開けた。清々しい陽光がすりガラスから優しく私に降り注いだ。まぶしくて私は目を細めながらも、少し螺旋を描く階段をいつもより心なしかゆっくりと降りた。

階段を降りきったとき、私を刺激したのは、光ではなく、匂いだった。それも、どこか懐かしい匂い。それが毎日私が嗅いでいる匂いだと気付いたのは、意外にもそれから私がもう一つドアを開けてダイニングルームに入るところだった。

私は首をかしげた。写真立てはまだ許せるまでの異様さだったが、これはもはや異様を超えて奇怪ですらあった。

鍋に火がかけられていた。湯気が出ていて、それに乗ってあのいいにおいが漂ってくる。ダイニングを抜けてキッチンへ行くと、それが玉ねぎのコンソメスープであることが分かった。それはいつも私が朝食として食べているものであった。

下を見てみると、そこには何年も使って錆びついてきたオーブントースターが、唸りを上げていた。中には、昨日私が買ったはずのくるみ入り食パンが、まるで私が今起きてくるのを知っていたかのように、いい塩梅に焼けていた。

私はため息をついた。何もかもが今日はおかしい。いや、ずっと前からこうだった気もするし、そうでない気もした。理不尽さからくる気持ち悪さがのどの先までせりあがってきた。私はたまらずに流しに首を突っ込んで、わけのわからなさとともに昨日食べて消化されつつあった内蔵物を一挙に吐き出した。何回も細かく咳きこみ、そのたびに唾液に交じって不快なにおいを発する胃酸がきれいに手入れされたタイルの上にこぼれおちた。私はたまらずに横を見た。一刻も早く汚らしい自分の吐きだしたものから目をそらしたかったのである。

そこにあったのは、注ぎたてのブラックコーヒーだった。いつも私が使っている白いマグカップに、湯気が立ち上る。

私はいつもなら自然に手を伸ばしていたはずだが、今日の私はどうにも、いや、何も口にする気になれなかった。全てができ過ぎて

いた。
昨日私がこうなるよう準備したのだろうか・・・・・・？いや、そんなはずはない。そんな遠大なタイマー機能を持つ電化製品を私が揃えた覚えはなかった。
となると、誰かがここにいるのだろうか。私は昨日誰かを家に泊めたのだろうか。
と、そこまで考えて、わたしは、ふと、あまりに恐ろしい想像図を浮かべた。
昨日までの記憶が、まるで完成済みのパズルをひっくり返したかのように、断片的にしか思い出せないのである。いや、思い出せるとしても昨日までであった。私はそれ以上前の記憶を思い起こそうと必死にキッチンを行ったり来たりしながら脳を回転させた。が、私の脳には、ただただあの朝一番に見た、真っ黒い写真の入った写真立てが思い起こされるばかりで、何もかもが消えてしまった。
私は、かつてない恐怖に足がすくんだ。一人暮らしの私には頼れる家族もいない。隣人に助けを求めようとしたが、きっと相手にされないだろうし、第一、私は隣人が誰だったかも忘れてしまったのだ。外に出ればきっと表札から何かを思い出せるだろうが、それをするのが怖かった。自分の記憶が消えてしまったことを、断固として認めたくなかったのだ。
私は今日幾多の悪夢を見させられたキッチンから一刻も離れようと、ダイニングルームに足を向けた。その前に、口を水道水でゆすぐ。水を口の中に入れて吐きだすと、急に体が水分を欲し始めた。いい香りがすぐ真横から鼻を刺激する。
私は呪いを閉めるようにして、ガスコンロの火を思い切り止め、オーブントースターのコンセントを引き抜いた。空しい音とともに、オーブンは食パンの過熱をやめ、いいにおいを漂わせていた鍋からも、こととというかわいらしい音が消えた。
ふと、喉の渇きが、私の視線をコーヒーに向けた。私は飲みたくなる衝動をこらえて、カップを逆さにひっくり返した。流しに黒い

液体が、恨めしそうに湯気を出しながら流れ去っていく。
それがすんでからようやく私はダイニングへと向かった。椅子に座ろうとしたとき。
・・・・・・どうして気づかなかったのだろう。
椅子は、不自然にも5つあった。一人で使うには不器用なほどに、テーブルは広く、一つだけが、私のお気に入りである黒い色を放つ木製椅子、あとは見慣れない椅子だった。あるいは記憶の違いから、忘れていただけかもしれない。が、一つ、たった一つの椅子が、私の恐怖を確信へと変えた。
私は思わずその椅子に近づいて、その背もたれに触れた。間違いなく実態であった。
私は尻もちをついて絶句した。あんなに大きな音が出るとは思っていなかった。
その椅子は、どう考えても、赤ん坊の使う椅子だったのだ。

4月24日　?.

私は、私を脅すかのように次々と恐怖を繰り出すこの家から脱出しようと、会社に行く準備を始めた。二階から降りてきたときとは逆に異常なスピードで階段を駆け上がる。私の書斎の扉を開けて、クローゼットに手を伸ばす。その時私の目の端にまた、真っ黒な写真立てがとらえられていた。

外に出た瞬間、私はいいようのない幸福に包まれた。肩に載せられた手を振りほどいた時の快感に似ている。大きく深呼吸をすると、肺胞までがみずみずしい空気に満たされた。家を振り返りたくなかったが、鍵を閉めるために、私は一度玄関の引き戸に向きなおった。

出てくるときには気づいていたのだが、靴は私のお気に入りのブーツと、庭で草むしりをしたりするときのサンダル、これだけだった。私はカギを閉めて一切を視界から消し去ると、会社へと向かった。

よく考えれば、このとき私の記憶は少なからず回復していた。庭で草むしりをしていたこと、そして何よりも、私は会社に行くことを思い出す以前に体で示していたのである。

会社で私は朝の思い出を断ち切る意味もあり、今まで以上に自分の作業に打ち込み、久しぶりに上司から声をかけられたのであった。会社ではある意味不思議なことだが、何の異常も起きていなかった。いつもよりキーを打つタッチが軽快だった。しばらくして、私は思わず、ピアノ、と必要以上の人間に聞こえる声で呟いた。何人かがこちらを向いたが、すぐに自分自身の作業に戻っていった。

ブラインドタッチの感触がピアノのタッチに似ていたことに気づいたのは奇跡といってよかった。さらにタイピングのスピードは上がった。今日家で見たのは自分の書斎と、リビング、洗面台、それ

に台所だけだった。が、部屋がそれだけのはずはない。確か2階にはまだ二つ、一階には一つ今日はまだ扉を開けていない場所があるはずだった。

一階のリビングのすぐ隣の部屋、あそこには、私が弾いていた、ピアノがあった。私はこんなにも早く失った記憶が徐々に取り戻されていくことに大きな喜びを感じつつあった。

会社の幸せな時間が（久しぶりのことだったが）過ぎて、私は帰宅の途についた。その道を通っていると、自分が何回もそこを通っていた気がした。私は自分の道を取り戻したのだ。私の足取りは午前中のタイピングに負けず劣らず軽快になった。

しばらく行くと、家までの曲がり角に、いつもは目にもとまらないはずの女性用洋服店が、なぜか今日は釘づけになった。私は、ガラスで仕切られた牢獄の中にたたずむ一人の女性の前で立ち止まり、その顔を見つめた。

その女は、タグのついた衣料品に体を包んでいた。息をしていなかった。それはそうだ、マネキンなのだから。だが、それが私には、どうにも、生きているように思えたのである。

というのも、その目が私を見つめて、いや、にらみつけていたからだ。

私はカエルだった。蛇がガラスの向こうから私を捕食しようと息巻いていた。

私はなんだか胸が苦しくなって、右手が自然と襟もとに伸びた。ボタンをはずす。動悸は何もしなくても自分の鼓膜に響いていた。

私はその場から立ち去ろうとして、体の向きを変えると、道の向こうに、私の家がみえた。赤瓦の私の巣だ。が、ここへきて私の脳裏に、再びあの黒い写真立てが現れた。私はふと家から目をそらしたくて、今ではだいぶ後ろのほうへ行ってしまったマネキンを振り返って見つめた。

マネキンはなおも私と目を合わせてきた。全くなびかない金髪が、

私を高圧的に見下している。私は怖くなって、その後もガラスケースの周りを行ったり来たりしたのだが、どこまでもどこまでもマネキンは私を見つめてきた。私は脳の奥がこの人形ごときに犯されている気持ちになった。モナ・リザの目がどこまでも追いかけてくるという話を聞いたことがあるが、だとすると私の前に立っているのは、極めて邪悪な美女だった。私を壊そうとしているのだから。

私は、耐えられなくなり、朝耐えられなかった我がスイートホームに走り出した。一度走り出すと、マネキンの顔が後ろから付いてくる気がして、私のスピードに拍車をかけた。家の前に着くころには、小学校の頃のかけっこと同じぐらい本気で走った感触がしていた。息が荒くなる。私は、ぜえぜえと体全体を鳴らしながら、朝の恐怖を締め切った引き戸のカギを回し、再び開けた。

靴が馬鹿丁寧にそろえられていた。一つは私のサンダルで、もう一つは私が気が向いたときに外出するためのブーツだったが、その隣に、朝にはなかった靴が置いてあった。

二つはどちらも小学生に満たないような小さい靴だった。一つはピンクと白で彩られたかわいらしげなスニーカー、もう一つは銀と青のストライプが目立つ男の子の靴だった。

さらに隣には、明らかにヒールの高さが男のものではない、黒い革靴が置かれていた。

私は率直に、ある、今までとは別の恐怖感を覚えた。それは、私以外にこの家に入る鍵を持つ人間がいる、という事実であった。それは私の人生を誰かに踏みにじられるかもしれないというあまり明るくない想像から来る、今日遭遇していなかった恐怖であった。

私は靴をそろえることも忘れて、周りを警戒しながらダイニングルームへの戸を開けた。電気がついていた。白いＬＥＤの光が、私の動向をわずかに収縮させた。まぶしい目で周りを見たが、誰もいない。私のいつも座る椅子の前には、すでに夕食が並べられていた。純白の輝きを放ち私の食欲をそそる湯気が立ち上っている。

私はその中の一品を見て、今まで抱いてきた恐怖心を一瞬すべて

忘れ去るぐらいの喜びにかられた。あまりの喜びに私は場違いながら涙さえこぼした。それは、何のことはない普通のアジの開きだったが、それは私にとってはきっと、いちばん思い出したいことだったのだ。私の楽しみは、ピアノもそうであったが、それより何より、週末につくり、自分の手で食べる開き干しであった。ことにアジは私の十八番であった。

わたしは、今すぐにでも頭からかじりつきたくなる衝動を抑えて、二階へと向かった。

午前中開けていない部屋を私は開けることにした。階段を上がってまっすぐ、その扉を開ける。

私はドアノブに手をかけるのだが、不思議なことに、ノブが回らないのだ。いくら回そうと力を加えても、ノブが私にあらがうように、いや、そこに部屋は存在しないとでも言いたげに、ノブはかたくなに回ろうとしなかった。私は首をかしげた。そんなわけがない。鍵がかかるドアではないし、第一ここにはいった記憶はない、と思った矢先私はほぼすべての昨日以前の記憶を失ったことを思い出した。きっと、何かがあったのだ。私がなにかの手違いでこのドアを開かなくさせてしまったのだろう。そう私は思いたかったが、肝心の理由が分からなかった。

隣の部屋は、引き戸だった。これなら空くだろうと私は両手をかけて左に思いっきり引っ張ったが、ここもなぜか開かなかった。ここから先は私の空間ではなかったのかもしれない。

私はふと、ここが二階の壁なのではないか、と思いついた。私は、二、三歩下がると、深く目を閉じた。しばらく自分の呼吸が階段にこだまするのを聞いた。目を開ける。

そこには、ドアがなかったのだ。

そこから私は狂ったように、何者かに用意された夕食、特にアジの開きをむしゃぶりつくように食べた。確かに私はあの時ドアノブを握ったのだ。まわそうともがきもした。ほんの数分前だから記憶

違いということはないだろう。忘れるように、ひたすら食べた。それでも足りなくて、私は冷やされていたビールを乱暴に開けると、ジョッキにも注がずそのまま一気に喉に注ぎ込んだ。アルコールが私の体を中から焼きつくそうとしていた。

わたしは何かを忘れるために食べ続けたのだ。私に食いちぎられて無惨に顔と背骨を残すことになったアジは、悲しそうに私を見つめていたが、それには全く気付かなかった。

私は会社に、これから5日間有給休暇をとりたいと申し出た。入社して一度も有給休暇をとっていなかった私のことだから上司は非常にびっくりしたが、旅行に行く、と口から出まかせを言うと、上司はとたんに素直にああ分かった、と返事をして電話を切った。

私は何とかしてこの気色の悪い現象の解明をしたかったのだった。

私はまだ開けていなかった一階の引き戸を、悪霊を振り払うようにして開けた。

そこには、ピアノがあった。私はアルコールのまわった意識のぼんやりした状態で、そのアップライトの前に座って、ふたを開けた。

８８鍵の白と黒で埋め尽くされた宇宙がそこにあった。私は、おもむろに手を載せると、その緩慢な動きとは裏腹に、昼のタイピングのようなスピードで、感情のあふれるままに弾きまくった。曲は、ストラヴィンスキーの『プルチネルラ　～ロシアの踊り』であった。華麗な響きが私の体のみならず、呪われているとしか思えないこの家を満たした。こんな難曲が自分に弾ける理由がよく分からなかったが、私の指はまるで次の音を指が欲しているかのように、無駄な動きを一切せずに動いた。光が次々とはじけては、私の小さな宇宙の中で跳ねまわった。私はしばしこの幸福に身をゆだねた。目を閉じると、より鮮明にその響きが頭の中に鳴った。

最後の和音を弾き切って、私は今日最大の幸せを体中に感じながら、風呂に入り、そのままの勢いでベットに横になった。風呂がい

つの間にか沸かされていて、写真立てが未だに黒いままであったこ
とは、私は気にも留めなかった。

4月25日

朝起きると、私の目に入ってくるのは、もうお分かりだと思うが、あの黒い写真立てである。さすがに一日たつと、私はこの状況に慣れてきていることに気づいた。私はその写真立てを手に取った。しばらく見つめていたが、だんだんこの黒が現実そのものなのではないかとさえ思えてくる。私は書斎の隅の一番目立つ所に写真立てを置きなおした。何か変化があった時にはすぐに視界に入れたかったためだ。私はお気に入りのクローゼットから、決して外では着られない恥ずかしいプリントがされた黒いTシャツ、かなり使い古したGパンをきて、ドアを開けた。左を覗いたが、そこは壁のままだった。昨日のようにドアがあるようなことはなかった。私はなぜか切なくなった。そこに壁があることではなく、ドアがなかったことが悲しかったのだ。

自分の記憶を正当化したいからだけなのだろうか？それとも、別の理由に起因していたのだろうか？

私はよく分からないままに、下の階へと降りた。あの悪夢のような昨日からすれば、ずいぶんと気の楽な動きだったが、次に聞いた人声が私の全神経を恐怖で逆撫でした。

あなた、ごはんですよ。

声は、そういった。

私はここが室内にも関わらず昨日の会社からの帰りのような勢いで残りの段をかけ下りると、思い切りダイニングへのドアを開けた。

誰もいない。ただ、朝食があった。

何かの嫌がらせだろうか。はっきりと聞こえたあの声に対して私は恐怖感のあとにそれ以上の嫌悪感を覚えた。悪趣味な人間が私のうちの合鍵を作り、私が起きる前に現れて飯を作っては、いたずらをして消えていくのだ。

私は憤慨しながらも、その湯気を依然として立ち上らせる米に箸

をつきたて、乱暴に口に放り込んだ。喰らいながら私はふと、この味にどこか懐かしさを感じる自分がいたことに気付き、わずかながら吐き気を催した。どうもいけない。せっかく有給をとった1日目である。もう少し暴れなければいけない。この悪質な、まるで、私に家族でもいるようないたずらを、何とかして止めなければならないのだ。私は、この犯人を見つけたら、そこら辺にいるお人よしの日本人からすれば少々やり過ぎるとでもいうような制裁を加えるつもりでいたのだった。

私は何気なく玄関に向かった。正直に言って朝一番の尿意を感じ、すぐ隣のトイレに行こうとしていたのが理由であったが、私はそこに白い発泡スチロールでできた容器が置かれていることに気づいた。

ふたを開ける前から、私の嗅覚はそそられていた。ふたを恐る恐る開けると、私はびっくりして腰を抜かしてしまった。まさにこの表現が適格といえよう。朝早くに私は大きな音を玄関に響かせたのだ。

そこに入っていたのは3尾の見たこともないような鮮度の良い大きなアジだった。まるで私に開き干ししてほしいような眼をしていた。

私は探索を一時中断したが、尿意に勝つことはできず、止むなくふたを戻して、憎むべき生理的欲求を沈めてから、その希望の箱を台所へいそいそと運んだ。

開けて改めてみると、なるほど立派なものである。春が旬なのかどうか知らないが、脂がのっていることはひと眼見て分かった。これを開き干しすれば、どれだけおいしいだろうか。

私は、さっそくまな板の上に載せ、包丁を取り出した。よく洗って、内臓を取り除くために腹に刃先を入れようとした。その時。

死んでいたはずのアジが、ぽーんと、ダイニングのほうに飛んでいったのだ。私はしばし唖然とした。死体が突然、それこそピンポン玉のように跳ねたのだから、驚くのは当然のはずである。心臓の

弱い者なら失神するかもしれない。事実、テーブルの上に飛んでいったアジは、そのまま動かなかったからだ。

ここで私の中に芽生えていた二つの感情は、結局開き干しを作りたいという一心に統一された。私は映画の殺人鬼のような形相でテーブルの上に再び沈黙したアジに向かって、包丁を突き立てた。するとアジはすんでのところでまた跳ね、今度は床に落ちた。私は埃がついただろうな、と思いちっ、と舌打ちをしたが、気を取り直し、加速をして一気にアジの間合いを詰めた。逃げ場を失ったアジは、私に腹をつき立たれる瞬間に私の顔面に向かって尾びれを直撃させた。私の怒りは頂点に達した。私は日本語に表記できないような、奇声を上げながら、私に打撃を与え床に着地しようとする味の背骨から背びれに近い部分に思い切り包丁を突き立てた。

一瞬、私の脳裏に、叫び声のようなものが聞こえたのだが、私には開き干しを作るという義務で頭がいっぱいであった。私は、素早く包丁を抜くと、魚を片手でつかみ、思い切りまな板にたたきつけた。アジは静かになった。

私はその後残りの2つももしかしたら跳ねるかもしれない、と思い、足早にはこの中にいた2尾のアジの腹部を一気にかき切った。

尋常ではないほどの鮮血がほとばしり出た。一部は私の顔面にかかり、私はあわてて水道の水を全開にし、憑きものを落とすようなイメージで顔を何回も洗った。

それから先は平穏だった。開き、腐らないように塩水につける。私のお気に入りの開き干し専用の水槽の中で、内臓を失った3匹のアジは、ぷかぷかと浮いていた。未だに腹部から血を噴き出しているのを見ると、私はぞっとするものを感じなかったわけではない。だが、それ以上に、これほどの上物を干物にするという高揚感が、私の神経を麻痺させていた。

わたしはその日、昨日発見した壁のことや、ピアノのこと以外何

の収穫も得られなかった。私はこのことに関して若干の失意を覚えたが、毎日の日課であるピアノの前に座り、また、おもむろに弾き始めた。いつも思うことなのだが、曲目を自分で決めるのではない。指が曲目を決めていた。まるで椅子に座ること自体が反射を引き起こすかのように。

ドビュッシーの『子供の領分　～人形へのセレナード』だったが、私はひきながら、昨日のストラヴィンスキーに見いだせなかった、ある奇妙な幻想をまぶたの裏に描いた。

見知らぬ、ちょうど小学生ぐらいの少女が、この曲を小さな、小さなステージで弾いている幻想である。少女は私と同じドビュッシーを、全く同じように弾いていた。テンポ感も、間も、あるいは音楽が紡ぎだす色さえ同じに思える。私はそれを遠くの席で眺めていた。いとおしげに。まるで、

娘のように。

私は残り１８小節のところで演奏を断ち切った。少女は消えた。私の呼吸は気付くと、昨日のは知った後異常に激しくなっていた。私は椅子ににもたれかかり、天を仰ぐようにして荒い呼吸を続けた。

瞼の裏側の少女は、昨日家に帰ってきたときにあった、あの女のこの靴と同じ靴をしていたのだ。

何かが、壊れ始めたことを私は直感で察した。大切なものが、割れてしまったガラスの砂時計のように、こぼれおちていく予感は、私の中で大きく、大きくなっていった。

その日夕食はあらわれなかった。別段不思議なことではない。今までが異常だったのだ。わたしは冷蔵庫を見た。野菜も肉もだいぶ少なかった。明日には買い物に行かなければならないだろう。私は簡単にゴマ油で野菜炒めを作り、残った部分でコンソメスープ、そしてご飯を炊き、ひとりで夕食をたべた。明日になったら、朝塩に漬けていたアジを倉庫に干さなければならない。

私は今日はいつもよりも早くベッドに向かい、自然と瞼が私に幕を下ろすのを待った。何も考えずすぐにベッドに突っ込んだ私に、いつ黒い写真立てを確認する暇があったというのだろうか。

黒い写真たて、その中にある真っ黒な写真。その右端に、シミが出てきたのだ。

そのシミは、むしろ、もともとあった写真のように、有彩色で綺麗に彩られたシミだった。

私は気付かずに、その意識を眠らせた。

4月26日

真夜中であった。きっと2時を回ったころであろう。私は昨日までとは違いベッドの上でも妙にそわそわしていた。西を向いている窓には、カーテンがかかっておらず、白い、向こう側がうっすらと見えるレースがかけてあった。月がぼんやりと映っていた。

私は何気なく目を少しだけ開いた。なにが気になったのかは分からない。

窓のほうを見て、私は体を図らずも硬直させた。窓に、いつしか見たマネキンの頭部がはりついていたのである。こっちを、じっと見ていた。

私は恐ろしくなった。布団は毛布もかぶっているから寒いはずはないのだが、私の歯はまるで真冬のようにがちがちとなった。

マネキンは、どこからともなく飛んできては、ドン、と大きな音を立ててぶつかった。音はしたのにに窓は全く揺れなかった。どれも同じ、あのガラスケースの囚人と同じ顔であった。次々と、際限なくマネキンはぶつかって、私を見つめている。

私は金縛りにあったように目をそむけることもできず、気づけば私の眼球は飛び出さんばかりだった。息が苦しかった。呼吸がだんだんつまってくる感じがした。走ったあとではない、まさに首を絞められている感触だった。

渾身の力を振り絞って、私はベッドからやっとの思いで転げ落ちた。今日一番の大きい音が鳴った。私はかなり不恰好とはいえこの理不尽な金縛りを脱出したのである。私は尻をついたままできるだけ遠ざかろうと、後ろへとずり下がり始めた。

するとマネキンの首たちは、窓の外で、口裂け女よろしく歯を剥き出しにして大笑いし始めた。笑い声は空気を媒介とせず、私の頭蓋骨のなかに直接響き渡った。強烈な音波が骨を砕かんとばかりに私を圧迫した。私は耳をふさいだが、反響は到底おさまらなかった。

私はその笑い声を消すために、喉から血が出るほど大声をしぼりだしながら、床を転げ回った。狂ったように、私は床で寝そべったままダンスを踊り続けたのだ。

叫び続けて酸欠になった。また吸おうとしたとき、窓の外にはもうマネキンはいなかった。電気をつけた。時計を見ると、２時３４分。真夜中に一人で暴れていた私は、今考えてみると実に滑稽であったことに気付き、恥ずかしさがこみあげてきた。

私は深いため息をして、再び電気を消すと、ベッドに倒れこんだ。感触がおかしい。私は、恐る恐る首を横に動かしてみた。

マネキンが、いた。私のベッドに横たわり、私を受け止めようとしていた。私はその胸の中に見事に倒れこんだのだ。

絶叫したのかしていないのかはよく覚えていないが、気絶したことだけは鮮明に覚えている。そう、私ははじめて失神というものを経験した。

起きてみると、股間がじっとりと濡れていた。どうやら私は昨日のマネキンの一件で失禁してしまったようだった。それはあれだけの夢を見れば、仕方のないことだろう。

しかし、本当にあれは夢だったのだろうか。私は確かに床で暴れ、電気をつけ、そして何より、マネキンの胸元にダイビングしたはずだった。

私は起き上がりまずパジャマを早々と脱ぎ捨て、一刻も早く洗濯機を回そう、と必死になった。その時、私の視界に飛び込んできたのは、あの黒い写真立てだった。

私はその異変に早々と気付いた。

それは、明らかに前とは違っていた。写真のふちが、まるで黒い部分をスクラッチすると、中から本物の写真が出てきたかのように、別の色に変っていたのだ。しかも、それはどこかで見覚えがあった。しかし思い出そうとしても、それが思い出せない。

私はきりきりと脳髄が痛むのを感じた。私は頭を両手で揉みほぐ

すように押しながら、下着だけでベッドに戻った。とりあえず、何かを着たいと思い、最初は、外に着ていけないようなジャージを身につけたのだが、よく考えると、食料はもう底を尽きかけていた。私は外出を考慮し、まあそれなりに見栄えはするというGパンに、ワイシャツを着て、下に降りようとした。

ふと、左を見る。壁があるはずだった。確かに壁だったのだが、私は徐々に目線を下にしていった時、吐こうと思っていた息が出なくなった。壁の下が、うっすらと扉のようになっていた。私は気味が悪くなり、階段に足を滑らせ、あっ、と声を上げる間もなくそのまま螺旋状の階段を一気に落下した。激痛が何度も私の背中に走り、私は一階の床についてから痛みをはぎ取るように背骨のあたりを掻き毟った。血が出るほどに。

食事は出なかった。私はいつものように一人朝食を作った。出来栄えは悪くない。あかだしのみそ汁に、白米と、卵焼きをつけた。黙々と食べながら、ふと、昨日塩漬けにしておいたアジのことを思い出した。あれを干さなければならないだろう。わたしは朝食の速度を速めた。最後の一口を口の中にほおりこんでから、私は食器を乱暴に流し台に下げると、私の大好きな水槽に歩み寄った。塩の匂いがする。まるで海水から上げて間もない魚を見ている気分になる。3匹のアジはすっかり生気を失って、漂っていた。

私は口の部分に使いこんでいる金属製のフックを突っ込むと、それを倉庫にかけてある物干しざおにぶら下げた。天日干しをしたいのだが、前それをやったところ、隣に住むアル中の男から理不尽な暴言をふりまかれ、厄介事に巻き込まれたくない私は、それ以来時間をかけて倉庫で干すことにしたのだ。とはいえ、あと2日もしないうちにできるはずだ。

私は、久しぶりにコーヒーを飲むことにした。思えば、コーヒーを飲んだのは、あの日コーヒーを見て嘔吐して以来だった。落ち着いて黒い液体を喉に注ぎ込む。

久しぶりに私は安堵のため息を漏らした。恐怖から来る息漏れでないため息は、長らくしていなかった。

今日ほど恐ろしい目覚めを経験したことはなかったが、それでも美しい習慣というのは規則的に守られるものだ。私は今日も一日の営みを終え、ピアノに向かった。

この何日間かで、私の記憶のピースは少しずつ、もとの形に向かって集束され始めたように思えた。少しずつ私の前に、広大な私の人生というパズルの一片がみえてき始めた気がした。が、私はこうも思ったのだ。

ピースはめるべき枠を私は間違えていないのか、と。

事実、奇妙だったことがあのあと一つだけあった。しみである。それもどす黒く変色した、だが、それはひと眼見て分かる、血のしみである。

最初は、流し台のタイルの上に、なんの不自然さもなく表れた。私は昼につかった豚肉に混ざっていた血だと自らを強迫して拭きとったのだが、十五分ほどたってまた見てみると、またそこに、血が現れるのだ。それも、その範囲はだんだんと広くなっていき、わたしは、9割の戦慄と1割のめんどうくささを抱えて台所と他の部屋を行ったり来たりしていた。ピアノに座る前には、ついにテーブルにまで現れた。そこは私がいつも使っているところで、夕食を食べたところに血の痕跡が現れることにはあまり良い印象を持てなかったが、しだいに私はこのたび重なる恐怖の波が、日常であるという、ある種の境地にたどりつくことに成功した。つまり、あの写真立ても、マネキンも、跳ねるアジの開きも、そしてこの血のしみも、全ては現実である。それは日常でしかない。それが私の結論だった。私は自分に結論付けさせた。

弾いた曲は、あとで調べたが、スクリャービンの『幻想曲　ロ短調』であった。独特の暗くも、明るくもない響きの中に、ぼんやり

と浮かぶ光。空気を一気に引き締める左手の重厚なバス。私はしばしすべてを忘れて指を泳がせ続ける。昨日のドビュッシーや、ストラヴィンスキーよりも、私はもっともっと、音楽に浸かっていった。

私にはわかっていた。体が、徐々にいいようのない、しかし確信に満ちた破滅に侵されていくのが。私は音楽でそれを追い払おうと、ピアノを壊すほどの勢いでのめり込んだ。が、そのうっすらと、やがて迫ってくる霧のような響きが、あの血のしみに思えてきた。私はその悪徳な妄想を焼き払おうとして、中間部の激しい場面を一気に滑らせる。

私は涙をこぼした。怖くて怖くて私は泣いていた。美しいメロディーが歌われようと、その陰には常に私の傷があった。あまりのギャップに私は吐き気さえ催した。が、私の指は止まらずに音を紡ぎ続けた。

どうしてわたしが、こんな仕打ちを受けなければならないのだろうか。

私は号泣しながら、食事をとるのも忘れ、周りの家からやめろ、という怒鳴り声がするのも聞こえずに、一晩中何回もその音楽を紡ぎ続けた。同じ曲を、何回も、何回も。

悪夢が、曲を変えた瞬間に、その一瞬に、私の中に入ってくるのを恐れていた。

私は朦朧とし始めた。もう何回目だろうか。最強のフォルティッシモを叩きつけ、真夜中の家を震わせた。世界は美しい。私だけが、醜かった。泣いても泣いても涙はとどまるところを知らなかった。

ふと、私は鍵盤を見つめた。鍵盤は、血で染まっていた。それも私の指から出た血ではなく、ずっと前について、そのままになっていたような。

私はそれにもう恐怖すら感じなかった。ただ弾き続けた。回を重ねるごとに完成度は増していき、私の音楽は天国へと限りなく近く昇華されていく。

１０回、２０回、３０回・・・・・・

私は疲れ果てた。もうあのマネキンを見たころと同じ時刻だった。私は最後の和音を鳴らし終えると、スイッチが切れたように、床に倒れ伏した。私はまどろんでいった。しみによって血塗られたピアノが、私を優しく見下ろしていた。

4月27日

どれほど眠っただろうか。私が起きたのはいつもの書斎ではなく、木とは思えぬほど冷たい床だった。ピアノがちょうど私のそばにあったので、ようやく昨日弾いたまま寝てしまったことを思い出した。私はまだ重い瞼をうっすらと開けてかすかな陽光を瞳孔の中に差し入れた。私はよろよろと立ちあがった。側にあったピアノにはふたをするのを忘れていた。

鍵盤を見て、私は恐怖を通り越して怒り、すら通り越したのだろう、あきれてしまった。血は、ついにピアノにまで伝染していた。が、それも昨日のことだった事を思い出した。

私は血を拭こうとしてピアノの上に置いていたフェルトを手に取ったが、その血の付き方を見て、私はあることを思い出したのだ。それは急に仮定から確信へと変わり、私は急いでピアノの上に乱雑に置かれた楽譜をとりだした。

楽譜を見て、私の確信は徐々に私の奥底の記憶を呼び戻していた。私の手は震えていた。楽譜を見た目を鍵盤に移す。

おととい弾いた、ドビュッシーのセレナーデ。その曲で使う鍵盤だけが、綺麗に血で染まっていた。まるで私が血の付いた指で音楽に陶酔していたとでも言いたげに。

それが私の、恐らく欠落していた大きなピースの一つだろう。なぜこんな大事なことを思い出さなかったのだろう。

私は、ピアニストだったのだ。そう、あの日までは。

そもそも私がストラヴィンスキーを弾けた時点で気付くべきだった。あれを弾けるレベルの人間はもはや素人ではない。私は体を震わせ、楽譜をできる限り静かにピアノの上に置くと、椅子に力が抜けたようにへたり込んだ。

わたしが２０歳の時だ。私のプロデビューはもうこの時には決まっていた。曲は子供の時から弾いていた、ドビュッシーの子供の領分、その中でも気に入っていたお人形へのセレナード、そして、私の先生（お恥ずかしいことに、この時名前を思い出せなかった）が選んでくれた、スクリャービンの幻想曲、そして何回もミスタッチを繰り返し、来る日も来る日も徹夜で練習した、ストラヴィンスキーのペトリューシュカ。そして、そして・・・・・・・

きっと思い出したら、もう二度と、忘れないだろう。天才と呼ばれた私が、バイエルやツェルニーより先に、一番最初に弾いた曲。

ショパンの、別れの曲。

私は取り憑かれたように、ピアノに向かいなおした。鍵盤にはまだ血が付いていたが、その血すら、私の記憶を呼び覚ましてくれたいとおしいものと感じた。私は静かに手を置き、昨日の激しさとはうって変わったように、優しく最初の音を鳴らした。

あの日、確かプロデビュー前最後の発表会の日の４日前だ。そう、忘れもしない４月２８日。私は包丁を珍しく握り、料理をしていた。確か、牛肉でも切っていたのか。私は指を使う職業であるから、指を切らないよう神経を集中させていた。

ふと、私の視界に、牛肉ではないものが入った。それは、さっきすべて切ったはずのウインナーであった。私は切り忘れたのだろう、と思ったのか、牛肉をわきにどけると、そのウインナーめがけて、すっ、と刃を通したのだ。

瞬間、私の脳髄に激痛が走った。包丁をとりおとした。先は明らかに肉のものではない、鮮やかな赤にまみれていた。私は震える左手を見た。

左手の先が、綺麗になくなっていた。親指と小指を除く３本の先が、まるでウインナーのようにまな板の上に転がっていた。中に骨

がみえた。見事に切断されていた。私の世界が止まり、やがて音をたてて崩れ落ちていくのが聴こえた。私はあろうことか、自身の左指をウインナーと勘違いしたのである。

どれだけショックだっただろうか。私は自分の手を愛していた。この手が音楽を紡ぐ手だ、そう思うだけで私の体は誇りで光り輝いた。ひとたびピアノの前に座れば、私は世界をたった１０本の指で完全に描ききることができた。

その手を、なぜ自分から切るような真似をしたのか。

あれは、私にしてみれば、自殺だった。私はあの時すんでのところですべての栄光を捨ててしまい、破滅の道を図らずも選んでしまったのだ。

あれから医者にすぐ行った。私は鬼のような形相で、片手に私の指を抱え、殺しに来たかのように医者に食らいつくと、医者は終始にこやかな形相で私を見つめた。私は徐々に落ち着きを取り戻し、そして号泣した。失ったものを冷静に、真正面から見ることがこれほど辛いこととは知らなかった。

指は奇跡的に元の形に戻った。しかし、そんなつぎはぎの指でピアニストになれるはずもなく、私の道は断たれたのだ。

しかし思うことがある。ここ最近弾いていた音を聞くと、どうもあの絶頂期、プロデビュー直前のような、深くて透明な音、あの音となぜか全く重なって聞こえるのである。それどころか、指を切る前よりももっともっと透明感のあるように感じられるのだ。

私の先でなるショパンは、ゆったりとした空気を放つメロディーから、とたんに激しさを持った厳しい響きへと変わっていく。

まだ疑問はあった。ピアニストが料理をするのはある意味危険だ。私のようにはならずとも、少なくともけがをする危険性はある。ピアニストが指を失うことは、すなわち命を失うことに他ならない。

表現の手段を失った芸術家は、ブタほどの尊厳もない。
私はなぜあの時料理なんかしていたのだろうか。そういえば、いつも誰かが料理をしてくれていたような気がする。最近私が作っている料理はどれも、手慣れてはいるが、どこかに違和感を感じていた。懐かしさ、とでもいうのか、それがまったくなかったのだった。安心感もなかった。これを食べると家に帰った気になる、とでもいうような、安心感。
疑問を浮かぶと同じくして、右手と左手はとたんにピアニッシモに収縮した。オルゴールのように鳴るピアノ。私はそこからは何も考えずに、最後まで流れるように弾きとおした。
朝の8時だった。鳥が鳴く声がする。
私は、ピアノに別れを告げて、部屋から出た。血をふくのを忘れられたピアノは、ひどく悲しそうに私を見つめていたようだが、背を向けていた私がそんなことに気付くはずもなかった。

いいにおいがすると思うと、私は倉庫のほうに向かった。扉を開けると、3匹のアジがうまそうな香りを充満させていた。しかし、私のこだわりであるもう一日、これを絶対に守らなくてはなるまい。私は今すぐにでも、起ったままかぶりつきたい衝動を必死に抑えながら、戸を惜しげに閉めた。

今日はピアノのことを思い出せたことだけで満足していた。私は部屋の散策にも飽きたので、仕事をすることにした。といっても、明後日までは休みである。休暇をフルに使うには、自宅で仕事をするのが一番だ。
私はノートパソコンをして、久しぶりに仕事に没頭した。不思議とパソコンを叩いているときは、悩み事を全くしない。会社だからかと最初は思っていたが、まるで仕事が忌まわしきものを遮断するシャッターのように思えた。

わたしは十分な仕事をしたと勝手に充実感に浸り、思いっきり腕を伸ばした。
今日はピアノのことで、非常に幸せな感覚を胸に握りしめ、書斎のベッドへと向かうことができた。決していい思い出ではなかったが、それでも私という人間を構成する大事なピースだった。それが入ったのだ。
私のパズルはもう完成間近だった。しかし私もうっすらとは感じていたのだが、このパズルには何かが足りなかった。今までの細かな記憶よりもっともっと大きい、そして私にとって一番大切な最後の1枚のピースが。
そんなことを思いながら、私はいつしか意識を失い、夢の世界へと旅立った。写真立ての中の写真は、恐ろしいほどに変化していることに私は気付かないままだった。人の形が、くっきりと黒く浮かび上がったのだ。周りは、夏空と草原に囲まれ、遠くに走らない人たちもたくさん移っている。ただ、真ん中にいる大きな、きっとこの写真の主役たちなのだろうが、その4人だけが、真っ黒だった。

夢の世界へ旅立った意識は、確実に、最後のピースに向かって近づき始めた。
破滅が、私を待っていたことは知っている。だが、もう、
逃げられないのだ。もう、遅い。

4月28日

やっと会えたね。
彼は、そういった。私は夢の中にいる事はわかっていた。だが、その顔を見て逃げられないことも分かった。
それは「私」だった。

おまえはだれだ、と聞きたかったが、彼は私の話を聞く前に再び話し始めた。

僕はね、あなたが知らないうちに封印したあなたの本当の人格だよ。・・・・・大丈夫、あなたは悪くない。僕がこうしているのはあなたのせいじゃない、こうして夢の中であなたと初めてめぐり合えたのも、偶然じゃないんだ。前に一度会ったことがあるだろう。あなた自身じゃない、他人として。そうだよ、２０歳の時だよ。忘れてただろう？
あなたは、本当に、かわいそうな人だ。きっと、あなた以上にかわいそうな人はいないよ。

あなたは、ゲシュタルト崩壊、って言葉、知ってる？ほら、漢字とか見慣れたものを見ていると、ふと、それが正しいもの、それが自分の知っているものでなくなる。簡単にいえばそんな感じだよ。この話、2回目なんだけど、もうあなたに同じ過ちを繰り返してほしくはない。あなたは強くならなきゃいけない、たぶん、世界で一番強くならなくてはいけない人間なんだ。たとえば、「あ」って字を書き続けると、それが、「あ」に見えなくなる。ふとそんな瞬間が現れるんだ。
あなたは、とても優しくて素直な人だ。きっと自分の周りで起こっていることを率直に受け入れただろうね。これが現実なのだ、と。

それがあなたの弱さだった。でもね、何度でもいうけど、それはあなたのせいじゃないんだ。

あなたの周りで、ゲシュタルト崩壊が起こっていたんだよ。

最初に起きたのは、あなたがピアニストとしてプロデビューする前の、２０歳の４月２８日に偶発的に起きた。きっとあなたはもうすぐプロになれるとものすごく喜んで、なおかつ、あなたはそんな自分を導いてくれた自分の手にものすごい愛をそそいだだろうね。それが、いけなかったんだ。

あなたの深すぎる愛が、対象をゆがめてしまった。ゲシュタルト崩壊だよ。あなたには愛した自分の指が自分の指でないように見えてしまった、感じてしまったんだ。それが一瞬でも、あなたの命を奪うには十分だった。結局あなたは、自分の指をウインナーと間違えて切断するという悲劇を自らの手で行った。その記憶がトラウマになった。だから昨日血まみれのピアノを見て自分がピアニストを目指していたことを思い出したんだろう？

しばらく僕はあなたの中で正しく人格として働いていたよ。あの日以来あなたはきちんと第二の人生を見据えて普通の会社にも就職できたし。おかげて今はあなたが何の支障もなく生活できるようになった。しかしあなたはそこで油断した。あなたが、じゃない、あなたの深層心理が、このつかの間の休息に緊張を切らしてしまった。

というのも、あなたは４月２３日、つまり、君に異変が起きた前の日に、あなたにとってとても大切な瞬間が訪れたことで、あなたは再び私を追い出してしまったんだ。

あなたに、子供ができたって聞いただけで。

そう、あなたは奥さんから、３番目の赤ちゃんが妊娠したことを告げられたのです。

・・・・・・あなたの御家族の歴史は、あなたが２０歳のときにはすでに始まっていましたよ。気づいていたでしょう？あなたがこのところ食事に何かを見失っていたこと、そしてなにより、４月２４日以降誰もいないはずの家で食事が用意され、おまけにその味はいつもの味、つまりあなたが愛していた味でした。

決定的だったのは、あなたが最初の日に職場から帰宅した時、あなたの見知らぬ女性と二人の子供の靴があったこと。それに、子供用の椅子でした。私はあの時にあなたがすべてを思い出してくれることに賭けていたのです。それがあの時にまだあなたが引き返せた最後のチャンスだったから。しかしあなたは、ついに気付くことがありませんでした。あの家には幽霊がいて、食事を作ったり、靴を履いて勝手に鍵を開けて入ったりしていなかったのではありません。

最初っから最後まで、あなたの愛する家族は、あなたのほんの、目の前にいたのですよ。

あなたに起こったゲシュタルト崩壊は、恐らく人間にとってあまりにつらい現象です。

あなたは、愛しすぎるがゆえに、たまに、その愛するもの自身をゲシュタルト崩壊によって見失ってしまうのです。

しかもあなたの場合は深刻でした。あなたの視界だけではなく、嗅覚、聴覚、全てがあなたの愛する家族を拒絶していました。家族はきっとここのところのあなたを不審に思ったはずです。何を話しかけても無視ですし、振り向きもしませんから。

ですがあなたの悲劇はここにとどまらねえ。あなたの精神的虚弱性は、さらにあなたの家族に破滅をもたらしちまった。私は最悪の予想、つまりあなたがその理不尽な状況から自殺することまでは想定して、警告を送り続けていました。しかし、その方向性が、まさかあなたの家族に向かうとは思わなかった。

もうひとつ、あなたが愛したものがあります。そう、アジの開き

です。馬鹿にしてはいけません。あなたの精神にとってここからは、訊くだけで強烈な衝撃を与え、ともすれば二度と戻れなくなるかもしれません。しかし私はあえて言わなければなりません。あなたは再起しなければならねえんだよ。

ゲシュタルト崩壊は、あのアジにまで起こった。あなたはアジの開きを愛していた。それも認めるでしょう？ピアノはならばどうだったか。恐らく２０歳のときの事件が、あなたに何らかの形で心の傷を負わせていたのでしょう。だからこそ、キーボードのタッチでわざわざ思い出さなければならなかったんだ。しかしあなたの家族とアジ、この二つと違って、あなたはピアノを最初からその本質でとらえられた。

あなたは、とてもおいしそうな、それも干物にしたいと思えるアジの、突然の出現をたいして気にも留めずにそれを実行に移そうとした。アジは跳びはねました。死んでいるはずのアジが。

あのアジはゲシュタルト崩壊で、別のものにゆがめられていたものだった。しかも運の悪いことに、それは・・・・・・

これ以上の事は申し上げられません。自分の目でお確かめになってくださいませ。・・・・・・だんだん言語に統一性がなくなってきたな、くそっ！どうしてこうなってしまったのでしょうか。早く起きろっつってんだよおい！時間ねえんだよ！！はやく、どうか早く。私はそう長く現実世界にはとどまれない身なのです。こうしてあなたの夢の中に現れてあなたと話をしていることさえ奇跡としか言いようがない。だからさっさとすまそう。あとはマネキンの話だけだな。私の精神さえも分裂しています。この私があなたの体に戻って幸せになれるとよいのですが。

マネキンはあなたの本質的恐怖心が、あなたの目を真実からそむけさせるために見せた強迫観念から来る幻想です。あなたがしてしまったことは、あまりにおぞましいことです。

あなたの潜在意識は、そんなあなたの虚弱な心を守ろうと、さら

に強い恐怖をあなたに見せつけたってわけだ。恐怖をさらなる恐怖で克服しようとした、いってみればそんなところかな。
ああ、もう戻らなきゃ。もう限界だな。・・・・・・ああ、最後に言っておかなければなりません。私が誰かについて。

私は、あの、黒い写真立てですよ。

気付くと私は涙を流してベッドに横たわっていた。思い出した。何もかも思い出したのだ。机のほうを弱々しく見ると、もう黒い写真立てはなくなっていた。そう、あれは私の家族の記憶が私に訴えかけていた、姿だった。徐々に自分の姿をなんとか見せることで、私の記憶を戻そうとした。私は無意識のうちに家族の記憶全てを真っ黒に塗りつぶした写真に変えて、書斎においてしまったのだ。
こうしてはいられない。私はそれが夢であり、何の現実性も持っていないことを疑う気もなく、着替えないまま下の階へと急いだ。気付かなかったが、書斎の近くにあった壁は、完全に扉となっていた。私が最初に触れたドアノブは、そこにあった。
下に降りてドアを開けリビングに向かっていきなり私は蒼白になった。おびただしい量の血が、それもしばらく前のとしか見えない、どす黒く凝固した血が、あちらこちらに飛び散っていた。昨日まではこんなものはなかった。しかし私の中の予想が現実となれば、それにも説明がつく。私の精神はもうズタボロだった。倉庫から漂ってくる匂いは、もはやアジの開きのいいにおいではなく、何か生ごみが腐ったような強烈な腐臭だった。きっと、あの倉庫の扉を開けたときに私の魂はきっと決壊するだろう。ピアニストを目指して挫折したあの日から、家族とともに、歩んできた全ての道のりが、あとかたもなく崩れ落ちる。
だが、私にはもう分かっていた。私にはこの扉を開ける責任がある。
私は生まれてから一番の滝のような涙を流し、次の瞬間、割れる

ほどの下げ美声をあげて扉を思い切り開いた。
「優子ーっ！！！」
そこにぶら下がっていたのは、私の愛する、家族だった。
私がアジと見間違えたのは、他でもない、私が世界で唯一愛し続けていた、優子であり、剛であり、絆奈であった。
見る影もなかった。全身を切りつけられたのは、私が跳ねるアジを何とか止めようと包丁を何度も何度も突き立てた結果であり、腹が首から股間に向かって大きく切り開かれているのは、開きを作ろうとしたのだから当然といえば当然であろう。口には、本来アジの口に差し入れるはずの金属製の鉤が入って、天井からゆらゆらと腐臭を放ちながら揺れていた。白目をむき、すでに頬からはカギの一部が突き出ていた。おびただしい量のハエが体中にたかっていた。
私は亡霊のようにゆらゆら揺れながら愛する妻のほうへ歩き、2，3歩進んだところで膝をついた。
私があの日、優子から子供ができたことを聴いたときは、私は飛び上がった。今年で小学校に入った剛は、ぼくおとうとがほしい、と元気いっぱいにいい、幼稚園の年長だった絆奈は、太陽のような笑みを浮かべて私を見た。優子は、私を、出会ってから一番の笑顔で抱きしめてくれた。私のピアニストへの道が断たれてから、まだ優子と私だけだった家族は、いつしか4人に増え、そして今、もう一人、生まれ出ようとしていた。私たちの未来の形。優子に指の手術後約束したことを思い出した。
僕はもうピアノが弾けないけど、優子、君はまだ僕のそばにいてくれるかい？
優子は、私に涙を隠そうと必死に笑っていた。けれど、落ちた雫のことがわたしには頭から離れなかった。私は優子の手を病棟のベ

ッドに伏したまま、優しく握った。温かい、手だった。

僕は、優子と僕の未来のために生きる。幸せは、僕ら二人で作っていける。

あの日から私はピアノを練習していた時間すべてを燃やしつくすようにして使い始めた。ピアノしか特技のなかった私は、太陽の上がっている時間をすべて就職に費やした。やっと仕事が手に入ったのは、それから2年後だった。私の就職が決まった時、優子は、あなたの妻でよかった、と、私に涙を隠そうと必死に笑いながら言った。落ちた雫を私はまた見た。が、それはあの日、静かな白い病棟で流した涙とは違う涙だったことは、私には心が引き裂けるぐらいよく分かった。

私はこれまでにないぐらい深く優子を愛した。最初に子供が生まれたとき、私は狂喜のあまり、二階から転落しそうになった。優子は大笑いして、そのあと私もつられて笑ってしまった。元気いっぱいの男の子。私たちは、剛と名付けた。どんな困難にも負けずに、自分の夢、本当の夢をかなえてくれる子供に育ってほしい、そんなささやかな願いを込めて。それには、私の失われたピアニストになって優子を世界中に連れて行ってやるという、私にしてみれば壮大な夢の思い出も含まれていたかもしれない。

そのあと優子は、もう一人欲しい、といった。私はそんな優子が嬉しかった。優子は、私たちの未来が幸せであることを知っていた。私はそう思い、期待にこたえようと、必死に優子を愛した。

絆奈という名前を思いつくのにはだいぶ時間がかかったが、それは、私たちの思いが一つになった名前、ということに他ならない。むろん剛の時もそうであったのだが、私はこの名前に、家族全員のつながりを込めた。全てが幸せにつながっていきますように、と。

どうしてだろうか。私はなぜこんなにも深く愛してしまったのだ

ろうか。愛しすぎるがゆえに私は愛するものを完全に見失ってしまったのだ。
私は嗚咽を漏らしながらも隣にあった青いポリ製のボックスのふたを開けた。私はもはや何を見ても恐怖を感じなかった。開きを作るには、内臓をとりださねばならない。そこに捨てられてあったのは明らかにアジのそれではなく、人間のものだった。異常に長い腸や、大きく、色のいい肝臓、どこをどう見ても、人間の内臓が乱暴にまとめて捨ててあった。
私は、再びぶら下がった愛する者たちの方を向き直った。
「優子、剛、絆奈・・・・・・みんな・・・・・・・」
私は、弱々しい、まるであの病棟の時の私のように、ぶら下がった死体を力いっぱい抱きしめた。おぞましいほどの腐臭とハエが私の顔じゅうを穢したが、そんなことはもうどうでもよかった。私は、愛していたはずだった。少なくともそれは、嘘ではない。れっきとした真実だ。
私の知った真実は、この上なく情熱的で、かつ残酷なものだった。

ひとしきり倉庫の地獄絵図の中で泣き、死体を抱きしめ、内臓まで両手いっぱいにして泣き続けた私は、部屋に戻った。ドカッと、ものすごい音を立てて私の体はソファーに崩れ落ちた。時計を見ると、もう2時間は倉庫にいたことになる。もうすぐ昼だ。
ふと、涙に曇った視界の中に、わたしは、最近まで見ていなかった封筒があることに気付いた。私は力が入らず立てなかったので、四つん這いでそれのある本棚まで向かうと、必死に両手で棚をつかんで上体を持ち上げ、やっとのことでそれを手に取った。
よく優子が使っていた、紫色の花が描かれた素朴な便箋だった、開けてみると、そこに私あてに手紙があった。どうして気づかなかったのだろう。それは、私がアジの開きを作る1日前に書かれていた。ずいぶんと長い手紙だった。
私は、それをふるえる手で開くと、静かに読み始めた。

「孝司へ。

昨日のあなたは、私だけでなく、剛や絆奈の事に全く気付かない様子でした。それをあなたに叫び続けたのですが、どうしても届かなくて。こうして手紙にすれば、あなたが気づくかなあ、と思って。子供たちは、もう泣きだしちゃって。お父さんがおかしくなっちゃったって泣きわめいてました。今は二階の寝室で寝ています。

こんな風にあなたに手紙を出すのは、これで二回目ですね。最初の手紙、覚えていますか？あなたが、包丁で指を切ってしまった日に、私が涙をこぼしながらひたすらつづったあなたへの手紙です。涙でできたしみが、ちょっと今でも悔やまれちゃいます。

あのときのあなたも、茫然としていました。指を切るまではまるで別人のようで、私がまるで視界に入っていない様子でした。私が話しかけても聞こえないのは、ピアノの練習ぐらいの時かと思っていたけど、あのとき私が気づいていれば、少しは良かったのかもしませんね。

ただひたすらに愛しています、って書き続けた手紙でしたけど、あなたがそれを呼んで号泣して私の名前をただただ呼び続けながら、私を指を切ったピアニストとは思えないぐらい強く、激しく、優しく、いとしく抱きしめてくれたこと、今でも忘れません。

あのときあなたがしてくれた約束、今も私は信じています。こうしてあなたの視界に再びはいらなくなってしまった今でも。

幸せは、僕ら二人で作っていける。

その言葉がどれだけ私にとって幸せな言葉だったでしょうか。正直に言って、あなたがピアノに打ち込み続けていたとき、私は嬉しさの半面、いいようのない深い孤独を感じていました。私は、あなたが遠くなっていくのが悲しかった。

だからあなたがピアニストの道を閉ざされて、私にあの約束をしてくれたときに流した涙は、本当は安堵の涙だったのでしょうね。

こんな私を、あなたが夢をあきらめてくれてほっとして涙を流した私を許して。

そのぶんあの後の約束は、私の心に一生残る傷を負わせました。優しい、いつまでも傷付いていたいと思える、そんな傷でした。私は未来のために、あなたに一生をささげる覚悟をしました。全くどうしてあなたをこんなに愛してしまったのでしょうか？・・・・・・大丈夫です、後悔なんて全然していませんから。

私が愛した孝司が、今まだあなたの中にいないことは残念ですが、きっと、きっと帰ってきてくれますよね？でも、もしも、あなたの中から私が永遠に消え去っても、私はそれでもずっとそばにいて、毎日料理をして、私たちの未来である剛を小学校へ送り出して、それから絆奈を幼稚園に連れて行って、それから、あなたの服を洗濯して、部屋を綺麗にして、そして、あなたが大切にしていたピアノ、秘密にしていたんですけど、私も始めたんです。ピアノを。まだ全然あなたには及ばないけれど、いつかあなたに、あなたの一番大切で、大好きな、『別れの曲』を聴いてもらいたいの。・・・・・・別れの曲なんて、題名がいけないよね。でも、あなたが好きだった気持ちわかる。これは、そんな悲しい別れじゃない。自分との別れ、いやなこととか、悲しかった事とかに別れを告げる、そんな曲だって、私は思う。

部屋が狭いって、残念ですよね。寝室には、私たち二人が入ったら、子供が二人入れないなんて。ねえ、あなたに私が戻ってきたら、あなたの部屋で寝ていいですか？いろいろ、また話がしたいし、笑いたいし、泣きたい。いろいろありすぎて困るけれど。

結局最初に戻っちゃうのでこまりますけど、他にことばもないんです。

ずっとずっと、愛しています。

優子」

私の涙は枯れ果てた。私の胸の中に一つのさわやかな風が吹いた。私は、迷わず立ち上がった。不思議とどこからか力が湧きあがってきた。私は、約束を果たさなければいけない。

私は台所の隅にある棚の引き出しにある麻縄をとりだすと、私の首に巻きつけ、きつく縛った。台になるようなものを探すと、椅子が目に入った。ずっとずっと、新婚の時からずっと使っていた椅子だ。私はそれを持って、倉庫に入った。

わたしは、家族全員に一番近いところに椅子を置くと、ひもを物干しざおにかけて下ろし、落ちないようにきつく結んだ。ここで失敗したら私は生涯の笑い物だ。私は未来永劫弱い人間としてその名を垂れ流す。優子たちにそんな自分を見られたくはなかった。

子供二人の顔を見た。可愛さのかけらもなくグロテスクな表情を浮かべていたが、私にとっては今もそれは私たちの未来であった。

優子を見た。私の、永遠の、人。

私は目を閉じて、思いっきり椅子を蹴った。喉がいきなり閉まる。息が苦しくなるが、酸素が入らない。顔が紅潮していくのが分かる。が、私は自然に笑みを浮かべる事が出来た。なぜって、隣には私の家族がいるのだから。腐臭などもうしなかったし、そこにあったのは、どこにでもある、一つの家族の姿だった。

私の意識は永遠に消え去ろうとしていた。もう、約束を破ったりはしない。幸せは、僕ら二人で作っていける。一人になんかさせない。私は、未来のために約束したのだから。

命がかすんでいくにつれて、私の耳にピアノの音が聞こえてきた。私の意識に浮かんだのは、黒くない、全ての思い出の詰まった、私の家族写真の入った写真立てだった。別れの曲だ。この世と別れると言えば別れなのだろうが、私にとってこの別れは、約束を守れなかった弱い自分への別れだ。

最後の和音が、長く、長く響いて、消えた。

4月28日（後書き）

・・・・・・なんとか完結しました。ふう。

文中に出てきた曲は、私のブログのほうでyoutube音声ですが、アップさせていただいていますので、よかったらご覧になってください。

URL：　http://blogs.yahoo.co.jp/itoterasaku0302/folder/215856.html

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3218o/

ゲシュタルトの庭で

2010年11月6日00時55分発行